大東亞戰下國性爺を聽きて存感

西村紫紅生

五月の文樂座に檜下釁竹古靱大夫が藝術院賞受賞記念として上演した國性爺合戰は時局下最も意義深き演題として私は滿腔の熱意を以て傾聽すると共に大近松の名作の眞精神を把握すべき絶好の機會として二三の教育家にも其觀聽を薦めたのである。

抑々此國性爺合戰は正德五年十一月一日竹本座に上演三年越十七ヶ月間大當りをとつた名狂言である事は餘りにも有名である。乍然何が名作の名作たる所以であるかは其院本を通讀して一層明瞭となつた即ち皇國精神の發揚と日本の日本人たる天賦の性格を遺憾なく網羅してゐる大近松の愛國の熱情の凝縮せる千古不滅の大文字である事であつた。宜なる哉三年越の大當りは當然の事であり假令目新しい當時のからくりの苦心が手傳つたにしても此名作名文章名構想が我々祖先の血を湧かせ感銘を與へられたに基因する處蓋し大なるものがあつた事は想像に難くない、此作は其發端を大明十七代思宗烈皇帝が淫酒に耽り忠臣鄭芝龍老一官の諫言を容れず猶且吳三桂の忠誠を無視して奸臣李踏天の姦計に陷り遂に滅亡の悲境に沈む、吳三桂は妻柳歌君との仲に出來た我子を身代りとして太子を皇妃の胎中より救ひ出し九仙山に立籠つて明朝再興の爲めに肝膽を碎くのである。思宗烈皇帝の勘氣を受けた老一官鄭芝龍は日本に亡命し平戸の漁夫の女と結婚男子和藤內を設け遙々波濤三千里を越へて在明當時に設けた娘錦祥女の夫五常軍甘輝を說いて俱に韃靼王及逆臣李踏天及貝勒王李海芳安大人等を滅ぼすべく訪ねて來た於茲婦女の爲めに節を枉げしと世の嘲笑を蒙る事を恥ぢたる五常軍甘輝は其妻錦祥女の貞と義に捨つる命に依りて和藤內と明朗なる提携となり遂に吳三桂等と共に韃靼を滅すに至る豪壯雄大なる構想と行文の流麗該博なる智能は大近松逝いて二百五十餘年の今日脈脈として我等の胸を搏つものがある。而も大近松が日本精神の顯揚と神國たる眞骨頂を此作品に橫溢せしめた點は只々敬服の至りであつて、即ち第二段目の千里が竹の一齣に於て和藤內が猛虎と組打ち大童となつて力戰中「母親鍛影より走り出でヤア〳〵和藤內神國に生れて神より受けし身體髮膚寄類に出合ひ力だてして怪我するな日本の地は離るゝ共神は我身に五十鈴川大神宮の御祓納受などかなからんやと肌の守りを渡さるれば實尤もと押戴き虎に差向け差上ぐれば神國神秘の

其不思議猛りに猛る勢も忽ち尾を伏せ」云々とあり又神符を首にかけやれば神力庇護の印にて敵安大人以下の軍勢に反攻して和藤内と協力敵を潰滅せしむる一項があり又其際歸順せし輩に對し一々月代を施し、ちやぐちう左衛門、呂宋兵衛、暹羅太郎其他じやが太郎兵衛さんとめ八郎いぎりす兵衛などゝ名を附して供廻りに使ふなど我等に溜飲三斗の思ひあらしめる、又第三樓門に於ても和藤内が城内の兵の非常識に憤激切入らんといき込むを大義の爲めには私の恥を捨て我身の無念を勘忍し人を懷け從へよと和藤内のはやる心を抑へ、小國なれ共日本は男も女も義は捨てずと云ひ放し、敢然として縛せられ城内に入り、甘輝に大事を明かして其即答を迫り、甘輝が妻錦祥女に白刃を擬するに際し錦祥女を庇ひつゝ「今爰で死なせては日本の繼母が三千里隔てたる唐土の繼子を見殺しにせじと、普く口々に日本人は邪慳なりと國の名を引出すは我が日本の恥ぞかしと叫んでゐる、而も死に臨んで韃靼王は汝等の母の敵妻の敵と思ひ込み必ず仇敵を亡せよと激勵を與へてゐる。第五に於ては延平王國性爺已に五十餘城を屠り幼帝を別殿に移し參らせ己が陣屋の上に伊勢兩宮の御祓大祓を勸請し吳三桂甘輝等の提案たる詭計を斥け母の最後の一言を想起して斷然正攻法を主張する日本男子の正義と孝の念に燃ゆる軒昂の意氣を示すなど而も其妻小睦を男裝せしめ一軍の指揮者たらしむる如き此大東亞戰下男も女も護國の勇士たるべき示唆を與へるものといふべく三百年の昔此大東亞戰爭あるを豫知せるが如き大近松の愛國心に私は更に〳〵襟を正さざるを得ない。今回の上演に際しては古靱大夫も其放送に感懷の一端を洩らした如く日本人の傳統的皇國精神日本女性の雄々しく又床しく優しき心念を體得して演出せられてゐる事と思ふ。實に今回の獅子ケ城は私がこれ迄聞いた中の最も傾聽に値ひし最も感銘の深い名演出であつた事は彼氏の藝妙と節調文章の渾然一如を思はせ彼是批判の餘地を與へない一大收獲であつた又清六の健腕益々冴へて大夫の音量曲節を補佐し語る邪魔をしない好女房役の使命を果した事を附記したい人形に於ては文五郎の母親は寸分の隙なく現代人形使ひの王者たる貫祿を示して餘蘊なく玉助の熱演を採り榮三郎の錦祥女が品位を保つ使ひ振りに將來の上進を思はせ老一官の小兵吉に今一歩古武士の俤を持たせ度く玉市の和藤内に靜止の狀態から動態に移る際に今一應の再檢討を要するを覺へしめた今後以上の人形使ひの人々が能く先輩名人の指導に依り益々其圓熟向上を望んで竭まない、兎も角藝術院受賞記念の上演に大東亞戰下最も適した演題を櫓下豐竹古靱大夫の偉大なる藝力及精神力に依りて大近松の作品の精粹を正しく我々の胸に甦せて吳れた事を衷心欣ぶものである。